

Breakfast at Tiffany's

—ホリー・ゴライトリーの色

外国語学部 英語英文学科 4年

宮原 千里

序

トルーマン・カポーティ (Truman Capote, 1924-84) の『ティファニーで朝食を』(Breakfast at Tiffany's, 1958) は、型にはめられた女性の生き方に疑問を呈した作品である。時代の常識にとらわれた生き方よりも自分の信念に従う自由な生き方を魅力的に見せるため、作品中では様々な「色」が非常に重要な役割を果たしている。

『ティファニーで朝食を』が書かれた 1950 年代つまり第二次世界大戦後のアメリカにおいて、女性は戦場から帰還した男性を癒す役割を求められ、妻や母となって男性のための家庭づくりに専念すべきという考え方を押しつけられていた²。カポーティはこの作品で描かれる自由奔放なヒロインの姿を通じてこういった考え方に対する疑問を呈したのである。

この作品は、ホリー・ゴライトリー (Holly Golightly) という女性の半生が一人の駆け出し小説家の「僕」の目線で語られる作品である。ホリーは天真爛漫な女性で、語り手以外にも多くの男性たちを翻弄しながら、ニューヨークという町で自由気ままに生きている。ホリーはティファニー宝石店に行くことで心に安らぎを感じ、同時にティファニーのような自分にとっての居場所を探し続けている。ここでいう居場所とは自分らしく魅力的でいられる場所を示しており、女性の居場所を家庭に断定する考え方に対して皮肉のこもった表現がされている。それは作中に細かく描写されている様々な色の表現からはっきりと読み取ることができる。色の表現はホリーに魅力を持たせたり、無くしたりする。髪や瞳の色、ホリーが何度も口にする赤という色、それぞれが重要な意味を持っているのだ。

本稿では上記で述べたように、この作品を取り囲む色について総合的な視点で考察し、場面によって移り変わる様々な色の中での自由に生きる女性の魅力を表す色、すなわちホリーの本当の色は何かということを明らかにしていく。

I. ホリーの色

作品中最も顕著に表現されている色がホリー自身の色、髪の色や瞳の色である。これらは最初に登場した際だけではなく作品が展開する中で何度も述べられている。こうして幾度となく描写されるのは、髪の色や瞳の色がホリーの心境とシンクロしているためである。よってホリー自身の色に注目することでホリーの心境を事細かに知ることができる。ホリーは自分の信念に非常に正直に生きている女性である。そのため、女性は男性を支えて生きるべきという枠にとらわれない生き方をできるのと同時に、愛する男性のために編み物や料理をすることを喜びに感じ、家庭的な女性になったりもある。自由奔放に生きるホリーにこそ魅了される僕の目線から描かれることにより、こうした状況の変化に応じてホリーの色の描写も神秘的なものになったり、普遍的なものになったりするのである。

A. 髮の色

ホリーが初めて登場した際に彼女の髪の色に関して僕はこのように述べている。

男の子のような髪には様々な色が混じり合っていた。黄褐色の筋があり、白子のようなブロンドと黄色の混じった房があり、それらが廊下の明かりを受けて光っていた。

The ragbag colors of her boy's hair, tawny streaks, strands of albino-blond and yellow, caught the hall light.(BT 12)

この部分から、ホリーの髪の色はただ単にブロンドの髪と言い切ることもできるはずだが、僕は非常に細かな描写を用いている。それだけ僕がホリーの姿に魅了されたことを暗示している。この頃のホリーは夜な夜な出かけては鍵を忘れ毎夜ユニオシに開けてもらうということを繰り返していた。ユニオシは毎日のように鍵を開けるため深夜に起こされることを怒っているが、ホリーは「許してくれるなら私の写真を撮らせてあげてもいい」と特に悪びれる様子もなく、警察を呼ぶとまで言っていたユニオシはその言葉でまんざらでもない様子を見せる。夜の街からホリーにつきまとって部屋まで来た男にもお手洗いに行くときのチップが少ないと言って追い返す。まさに男を手玉に取っているシーンを僕は目撃し、上記のような印象をホリーから感じたのである。男性を支える女性とは真逆のホリーの姿に魅力を感じたということになる。

しかし、のちにホリーと婚約するホセ・イバラ＝イエーガー (Jose Ybarra-Jaegar)との子どもを流産し入院しているときのホリーの髪の色に関しては「白っぽいヴァニラ色の髪 “her pale vanilla hair”」という風に具体的な色で端的に表されている。これはホリーの心境の変化に合わせて僕が受けた印象が大きく変わっていることを示している。ホリーは自由奔放な異端者からごく一般的な女性になったのである。

このときの僕との会話でホリーは跡取りを無くしてしまったことを嘆いている。固定概念化した女性像とは真逆の存在であったホリーが愛する男性との子どもを失ってしまったことでかなり弱っているということである。ホセとの間に子どもができれば仕事に出かけるホセがない間ホリーは家庭を守り子どもを育てることをしなければならなくなる。よって子どもを失ったことを悲しむということはホセの家庭を守ることのできなかった悲しみにもとれる。そういう視点から見れば、この場面では今までの自由奔放なホリーの魅力が失

われてしまったことを髪の毛の色の表現で表していると言える。

また、兵士として戦場へ赴いていた実の兄フレッド (Fred) が死んでしまったという知らせを受けた後のホリーの髪の毛はもっとわかりやすく変化していた。「彼女の髪は黒みを帯び、体重も増えたようだった。(Her hair darkened, she put on weight.)」(BT 80) というように今までの白っぽいブロンドの髪とは全く違う色味になった。その時のホリーにはまさにはっきりとした変化が表れている。

ホリーらしくないことだが、家庭生活に対する強い関心が急激に高まり、その結果ホリーらしくない買い物がいくつかおこなわれた。パーク＝バーネットのオークションで、彼女は「追いつめられた牡鹿」模様のタペストリーを手に入れた。ウィリアム・ランドルフ・ハーストの所有になるゴシック風の「イージー」チェアを二つ揃いで買い求めたが、それは実に気持ちが暗くなるような代物だった。モダン・ライブラリを全巻揃え、クラシック音楽のレコードをどっさり棚に並べ、メトロポリタン美術館の複製美術を数えきれないくらい買い込んだ。その中には中国の猫の置物もあったが、本物の猫はそれを嫌って、見るたびにふうとうなり声をあげ、最後にはとうとう壊してしまった。ウェアリング社製のミキサーと、圧力調理鍋と、料理の本を一抱え買った。彼女は午後中かけてその狭苦しい台所で、汗をかき、いろんなものをはねかえしながら、主婦業に励んだ。

[U]n-Holly-like enthusiasm for homemaking resulted in several un-Holly-like purchases: at a Parke-Bernet auction she acquired a stag-at-bay hunting tapestry and, from the William Randolph Hearst estate, a gloomy pair of Gothic “easy” chairs; she bought the complete Modern Library, shelves of classical records, innumerable Metropolitan Museum reproductions (including a statue of a Chinese cat that her own cat hated and hissed at and ultimately broke), a Waring mixer and a pressure cooker and a library of cook books. She spent whole hausfrau

afternoons slopping about in the sweatbox of her midget kitchen….(BT 80)

本当の居場所を見つけるまで、物は所有すべきではないと言っていたホリーが実用的な家具を買い集めるという衝撃的な変化が起こっている。唯一の肉親だったフレッドの死という大きな消失によってホリーには取り急ぎ居場所が必要になってしまった。そのために自分の住んでいる家を自分の居場所ということにしてしまったのだ。居場所を手に入れたことで表面上はこれまでになく満ち足りて幸福になったのかもしれない。しかし、自由奔放に居場所を追い求めていたホリーの魅力は髪の毛の色味と共に”darkened”してしまったと言える。

B. 瞳の色

髪の色と同じように印象的に表現されるホリー自身の色が、瞳の色である。初めて出会った時のホリーはサングラスをかけていたために髪の色のみについてしか語られていなかったが、その後自身の部屋にいる男から逃げて窓から僕の部屋にやってきたホリーを見たときに初めて瞳に関する描写がされる。

眼鏡をかけていない彼女の目は、宝石鑑定士みたいにぎゅっとすぼめた目で、探るようにこっちを見ていたからだ。瞳は大きく、いくぶん縁で、いくぶん茶色だった。髪と同じようにあちこち色が混じっている。そして髪と同じように生き生きとした温かな光を放っていた。

…[I]t was obvious now that they were prescription lenses, for without them her eyes had an assessing squint, like a jeweler's. They were large eyes, a little blue, a little green, dotted with bits of brown: vari-colored, like her hair; and, like her hair, they gave out a lively warm light. (BT 18)

髪の色と同じように様々な色が混ざっていることが細かに表現されている。”like her hair”という言葉を二回繰り返しているところも、瞳と髪の色

には共通した部分があるということの裏付けとなっている。自分で部屋に呼び込んだ男が酒を飲んで野獣のようになってしまったからといって、ほとんど初対面の男性の部屋に窓から入り込むという常識外れのことをしていはるはずなのだが、この時のホリーの瞳は様々な色が混ざり合い、生き生きとした温かな光を放っている。この描写は僕が常識にとらわれず自由に生きるホリーを魅力的に感じたことの証拠である

また、入院中にホセとの跡取りを無くしてしまったと語るホリーの瞳は「その目は、雨水みたいに透明だった。(Her eyes, [...] clear as rain water ...)」(BT 97)と表現されている。色に関しては一切描写がなく、無色透明とされている。ホセとの子どもを守れなかったことを悲しむホリーから以前の自由奔放さからきていた魅力が消え、そのために髪の色と同じように瞳にあった様々な色が無くなってしまったのである。

II. 赤い色

赤という色はカポーティがこの作品の中で家庭の天使よりも自由に生きる女性の魅力を描こうとしたことを証明する上で非常に重要な役割を果たしている。ホリーは作品中で何度も「いやったらしいアカ」という言葉を使っている。「いやったらしいアカ」とはホリーを苦しめるものである。

A. ドクと赤

ドク・ゴライトリー(Doc Golightly)はホリーの夫で、テキサスの田舎で獣医をしている。ホリーは幼いころに両親を病で失い、兄のフレッドと共に親戚の家に預けられたがその家から逃げてきたところをドクに保護されたという過去がある。ドクには既に子どもがいたが子どもたちも皆ホリーとフレッドを歓迎し、最後にはドクは自分の子供よりも年下のホリーにプロポーズをする。その時のホリーは「結婚したことはまだ一度もないしね。」と言ってプロポーズを受けたのだが、法律上は結婚を認められる年齢ではないため正式な結婚ではなかつたとホリーはのちに述べている。ドクの言

葉からホリーの結婚生活はただ遊んでいただけで一生懸命夫や子どもたちに尽くすということはなかったとわかる。

「あれが幸福でなかったなんて、誰にも言わせんよ！」と彼は挑みかかるように言った。「私たちはみんなであれを甘やかしたんだ。あれは指一本上げる必要がなかった。パイを食べたり、髪を梳かしたり、雑誌を郵便で取り寄せたりすることのほかにはな。」

“Don’t tell me that woman wasn’t happy!” he said, challengingly. “We all doted on her. She didn’t have to lift a finger, ‘cept to eat a piece of pie. ‘Cept to comb her hair and send away for all the magazines…” (BT 69)

あれが幸福でなかったとは言わせない、という言葉には一種の懇願が表れている。ホリーはドクの一家にたっぷりと甘やかされて、何の苦労もせずに過ごしていた。ホリーが不幸ではなかったにしても、実の兄フレッドすらも置き去りにしてニューヨークへ出て行ったのだから、ホリーがこの頃の暮らしに満足していなかったことは明らかである。つまり、ドクがホリーに与えてしまった赤とはルラマーという一人の人間としての意思を無視し、自分のものさしで測った幸福や居場所を押しつけてしまったことだと言える。このような状況は1950年代アメリカの主婦たちが抱えていた悩みとよく似ている。

Their only dream was to be perfect wives and mothers; their highest ambition to have five children and beautiful house, their only fight to get and keep their husbands. They had no thought for the unfeminine problems of the world outside the home; they wanted the men to make the major decisions. They gloried in their role as women…(FM 18)

『新しい女性の創造』(*The Feminine Mystique*, 1963)の中でこういった一文がある。要するに、家庭に入った女性たちは夫や子供のために最良の妻や母

となることに喜びを見出していたということである。しかし同時にそういうものでは満たされない女性たちも多く存在した。そういう女性たちは、他の女性は女らしい役割で満たされているのに自分は満足できないことは恥ずかしいことだと感じていた。(Friedan 1963) そのためにアメリカの女性たちが感じていた「いやつたらしいアカ」は共有されることなく、女性たちはひたすら得体のしれない不安感を我慢するしかなかった。その点ホリーはというと、「いやつたらしいアカ」の存在をはっきりと感じとりそこから逃げるという選択をしたのである。

私はもう十四歳じゃないし、ルラマーでもないんだとどれだけ言っても通じないんだ。でもいちばんの問題は(そのことは二人でそこに立っているときにわかったんだけど)私は実際には何一つ変わっちゃいないってことなのね。私は今でも七面鳥の卵を盗んだり、いばらの藪を駆け抜けたりしているルラマーなの。今ではそれを『嫌つたらしいアカ』って呼んでいるだけ」
I’m not fourteen any more, and I’m not Lulamae. But the terrible part is (and I realized it while we were standing there) I am. I’m still stealing turkey eggs and running through a briar patch. Only now I call it having the mean reds.” (BT 73)

ホリーはドクがルラマーのためを思いつくしてくれていることがわかっていたから、ルラマーという影を残して、自分は別人のホリーとなることで与えられた幸福の中から逃げたのである。ホリーにとって他人から与えられた居場所や幸福は本当の居場所とは言えないものである。満たされているはずなのに自分は本当の居場所を見つけることができないというジレンマからくる不安感をこのときのホリーは感じていたのだ。そしてこの不安感は多くのアメリカ人女性が抱えていたものと同じものだったと言える。

B. ホセと赤

ホセはブラジルの外交官で、元はマグ・ワイルドウッド(Mag Wildwood)という一度ホリーのルー

ムメイトになる女性の恋人であったが後にホリーと婚約を交わす。ホリーは他の男性とは違うものをホセに感じ、本気で愛していた。しかしホセの体面を非常に気にする性格のために、ホリーがマフィアの頭領であるサリー・トマト (Sally Tomato) の共犯容疑で逮捕されたことを機に、手紙を残して一方的に婚約を解消する形でブラジルへと帰ってしまう。

ホリーが知り合いの男性たちを呼んでパーティを開いた次の日、僕がホリーの部屋を訪ねた際にホリーが言った台詞では、

「大変なの。あの人肺炎になりかけてるのよ。ひどい二日酔いで、その上に例のいやったらしいアカにみまわれているんだから」。

“there she is, on the verge of pneumonia. A hang-over out to here. And the mean of reds on top of it.” (BT 47)

という風に述べられている。いやったらしいアカにみまわれている、というのはマグがホセと結婚しようとしていることを指している。ホセはブラジルでそれなりの地位を確立しており、ホセと結婚することはブラジルについて行って嫁入りしホセを支えていくという人生を歩むということを意味している。居場所を手に入れる代償に自由な時間を手放すということである。

「ブラジル人とけ、け、結婚するっていう決心がつけばいいんだけどね。そして私自身もブ、ブ、ブラジル人になっちゃうっていう決心がつけばね。それは私が越えなくてはならないとても大きな渓谷なのよ。なにしろ六千マイルも離れたところにある国だし、言葉だってわからないし……」

“If only I could get used to the idea of m-marrying a Brazilian. And being a B-b-brazilian myself. It's such a canyon to cross. Six thousand miles, and not knowing the language——” (BT 49)

マグが言っているこの台詞こそが「いやったらしいアカ」を具現したものである。ただ単にホセと結婚すると言うだけならマグは「いやったらしいアカ」にはみまわれていない。重要なのは結婚することで、アメリカ人という自らのアイデンティティを捨ててブラジル人にならなければいけないということなのだ。女性が家庭に入ることで自分自身のアイデンティティを捨てて妻や母といった役になると同様である。

この場面ではホリーはペディキュアを塗るという、外の世界に出る女性ならではのおしゃれをしているのに対してマグは編み物という家庭の中にいる女性の象徴のような行動をしているという二人の対照的な描写も印象的である。

ホリーはホセと婚約し、家庭を守る女性として家事をするようになりおしゃれもしなくなる。家庭に入るという意味では同じだが、ドクといいたるに比べれば今の状況は異なっている。何もせずにそこにいるだけで居場所や幸福を与えられていた頃と、ホセのために編み物をしたり料理をしたり働くことで自分の居場所を確立する今とでは、少なくともホリー自らの意志と力で居場所を作り出しているという違いがある。ホリーは「いやったらしいアカ」の意味は昔の「七面鳥の卵を盗んだり、いばらの藪を駆け抜けたりしているルラマー」だと言っている。僕にとってホセと婚約してからのホリーは”un-Holly-like”であり、以前のように破天荒だったホリーのような魅力を感じていないが、ホセと婚約したのはホリーが自由に生きた結果である。

そうじゃなくて、私の言ってるのは、自らの則に従うみたいな正直さなわけ。卑怯者や、猫っかぶりや、精神的なペテン師や、商売女じゃなきや、それこそなんだってかまわないの。不正直な心を持つくらいなら、癌を抱え込んだ方がまだましよ。だから信心深いとか、そういうことじゃないんだ。もっと実際的なもの。癌はあなたを殺すかもしれないけど、もう一方のやつはあなたを間違ひなく殺すのよ。

…[B]ut unto-thyself-type honest. Be anything but a coward, a pretender, an emotional crook, a whore: I'd rather have cancer than a dishonest

heart. Which isn't being pious. Just practical. Cancer may cool you, but the other's sure to. (BT 83)

カポーティは自由に生きる女性の魅力を描いたと同時に、「自由に生きる」という型にはまった生き方もまた間違っているとホリーを通じて表しているのだ。

結

女性は男性を癒すための家庭づくりに専念すべきという考え方、男性だけが作り出した考えとは言えない。その考え方の型にはめられた女性自身もそうあるべきという考え方を持ち、そして自分が家庭のために頑張っていることこそが居場所を持っていることの証明と信じ切ってしまうことにも問題がある。ホリー・ゴライトリーという女性はそんな常識にとらわれず、偽物の居場所に落ち着くことに違和感を覚えることができる人物である。そして自分の信念に従って自由に生きている。その姿は「本物のまやかし」として人々を魅了する。『ティファニーで朝食を』という作品においてカポーティはそんなヒロインを生み出す手法として様々な色の表現を散りばめたのである。

映画スターであることと、巨大なエゴを抱えて生きるのは同じことのように世間では思われているけれど、実際にはエゴなんてひとかけらも持ちあわせていないことが、何より大事なことなの。リッチな有名人になりたくないってわけじゃないんだよ。私としてもいちおうそのへんを目指しているし、いつかそれにもとりかかるつもりでいる。でももしそうなっても、私は尚且つ自分のエゴをしっかり引き連れていたいわけ。いつの日か目覚めて、ティファニーで朝ごはんを食べるときにも、この自分の今までいたいの。

Being a movie star and having a big fat ego are supposed to go hand-in-hand; actually, it's essential not to have any ego at all. I don't mean I'd mind being rich and famous. That's

very much on my schedule, and someday I'll try to get around to it; but if it happens, I'd like to have my ego tagging along. I want to still be me when I wake up one fine morning and have a breakfast at Tiffany's.(39)

この言葉こそ、カポーティが女性の在り方に關して言いたかったことのすべてである。自分のエゴというものを一切殺して誰かに尽くすより、自分の思うままに生きることに魅力があるのだ。こうした価値観をはっきりと言葉にできるホリーは、保守的な風潮があった戦後のアメリカ³においてはある意味でアンチヒーローとしての役割を果たしていたともいえる。(Hassan 1962) ホリーはそれだけ異端な存在である。

僕はそんな時代に対するアンチヒーローとして自由に生きるホリーに魅力を感じ、それが作中の場面による色の表現の違いにつながったのだと考えられる。そしてホリー自身は自分の信念に従わない生き方を「いやったらしいアカ」と言い換えている。このように『ティファニーで朝食を』における色の表現の重要性がわかったところで、ホリーの本当の色は何なのかということに立ち返ってみると、答えは無い。赤という自分の信念に反するものでなければ、何色にも成り得る。なぜならホリーは自由に生きていて、まだ自分の本当の色、すなわちティファニーのような居場所を探している最中なのだ。常識や世の中の価値観にとらわれることのない居場所を見つけたとき、ホリーの本当の色が初めてわかるのである。

きっと猫は落ちつき場所を見つけることができたのだ。ホリーの身にも同じようなことが起こっていればいいのだがと、僕は思う。そこがアフリカの掘っ立て小屋であれ、なんであれ。

Certain he'd arrived somewhere he belonged. African hut or whatever, I hope Holly has, too. (BT 111)

ホリーの見つけた色が何であろうとそれはホリーが心から居場所と感じられるものなのだ。その色はきっと髪や瞳の色にも負けないくらい、僕をは

Breakfast at Tiffany's—ホリー・ゴライトリーの色

じめとした人々を魅了するものであろう。カポーティは時代の型にはめられた女性たちにもホリーのように自分の生き方を探してほしいというメッセージをこの作品に込めたのである。

註

- 1 Truman Capote のテキスト *Breakfast at Tiffany's* については Vintage 版を使用。本書は BT と略記し、引用文献の項数によって示す。日本語訳は村上春樹訳を参照。
- 2 戦後アメリカの女性観については村山(100)を参照。
- 3 1950 年代アメリカの時代風潮については伊藤(174)を参照。
- 4 Betty Friedan のテキスト *The Feminine Mystique* については Norton 版を使用。本書は FM と略記し、引用文献の項数によって示す。

引用文献

Capote, Truman. *Breakfast at Tiffany's*. New York: Vintage Books, 1993. Print.
—『ティファニーで朝食を』 村上春樹訳 新潮社 2008 年

Friedan, Betty. *The Feminine Mystique*. New York: W.W.Norton & Company, 1963. Print.

Hassan, Ihab. "The Character of Post-War Fiction in America." The English Journal 1 (1962):1-8. Web. 24 May 2016

伊藤貞基「第 5 章 1945—現代」『アメリカ文学史—植民地文学からポストモダンまで—』別府恵子・渡辺和子編 ミネルヴァ書房 1989 年 174 – 89

村山瑞穂「『ティファニーで朝食を』の映画化に見る冷戦期アメリカの文化イデオロギー—日系アメリカ人 I・Y ユニオンの変容を中心に—」『愛知県立大学外国語学部紀要』39(2007) : 97 – 114 Web 16 Sep. 2016